

シンポジウム報告

スポーツ史学会第31回大会シンポジウム報告

Reports presented at the Symposium
of the 31st Annual Meeting of Japan Society of Sport History

スポーツ史における女性

—— 日英の比較から ——

Women in Sport History: Comparative study between UK and Japan

開催日時：2017年12月2日(土) 15:55~18:00
開催場所：日本女子大学百年館低層棟 百207教室
司会：大沼 義彦 (日本女子大学)
シンポジスト：キャロル・オズボーン (リーズ・ベケット大学)
掛水 通子 (東京女子体育大学)
通訳：池田 恵子 (北海道大学)
堀口 郷

*シンポジウムの再録にあたって

今回のシンポジウムの再録にあたっては、シンポジストの先生方とも相談した結果、キャロル・オズボーン先生の報告については、当日配布しました報告資料と同じ内容であるため、これを再録することとしました。掛水先生の報告については提示された資料も豊富であったため、これも含めて改稿していただきました。

尚、本シンポジウムは、日本スポーツ体育健康科学学術連合の助成を受け、実施されました。

＜シンポジウムの趣旨＞

大沼 義彦（日本女子大学）
OHNUMA Yoshihiko (Japan Women's University)

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が近づいています。2012年ロンドン大会では、女性アスリートや障害者の活躍に注目が集まりました。これまで見えにくくなっていたものが急に表舞台に登場したかのようでした。オリンピック、パラリンピックの開催は、アスリート（＝人間）に対する認識を変化させる一つの契機となりました。2020年東京大会ではどうなるのでしょうか。

「女性活躍」の時代と言われています。開催校である日本女子大学（1901年開学）では、成瀬仁蔵の『女子教育』（1896年）に基づき、女性教育が計画・実施されてきました。同書の第四章には「體育」があります。成瀬は、日本における女子体育を興していくために、①「日本體育学を興すべし」、②「體育教師養成所を設くべし」、③「美麗の標準を変更すべし」、④「早婚の弊を矯正すべし」と述しました（馬場，2014）。欧米の知見を参照しながら、草創期の日本女子大学では、女子体育を研究し、その実現に向けた大いなる挑戦（あるいは実験）が行われていた、といえるでしょう。運動会で行われた「日本式バスケットボール」、「自転車」などはその証左といえるでしょう。開催校として、女性、スポーツというキーワードを設定しました。

今日、オリンピックに出場する日本の女性選手数は、男性のそれとほぼ同数か、上回る場合もみられます。しかし、これまで女性のスポーツ活動に光が当てられてきたとは必ずしもいえません。スポーツをする女性とは如何なる存在であったのでしょうか。またスポーツ史研究における女性とは。

本シンポジウムにおいては、日英の体育・スポーツ史における女性に焦点を当て、その研究蓄積と軌跡をたどりたいと思います。ここには二つの課題があります。一つは、「女性」と「スポー

ツ」の関係です。もう一つは、これと「スポーツ史」という学問領域の関係性です。こうした問いを念頭に置きながら、その先にある研究視角や「女性スポーツ」の未来について、シンポジスト、会員の皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

文献

馬場哲雄，2014，『近代女子校等教育機関における体育・スポーツの原風景』翰林書房